

バレト写本所収福音書抄註解(3)

鈴木, 広光

青木, 博史

<https://doi.org/10.15017/2559325>

出版情報 : 文學研究. 96, pp.1-13, 1999-03-30. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

バレット写本所収福音書抄註解（3）

鈴木 広光・青木 博史

○枝の主日 (Mt. 21: 1-9) 聖經直解 5-2 「封齋後第六主日・聖枝瞻禮之聖經直解」

1 ゼズス ゼルザレンへ近付給ひ オリベテの山の麓ベトハゲといふ所にをひてヂンポロ二人を召て 2 宣ひけるは 汝達向ひの城にアサナ⁽¹⁾親子繋がれてあるを解き赦し引きて来(キタ)らるべし 3 もし人あつて尤めば⁽²⁾御主の御用と答へられよ 即赦すべしと宣ひて遣し給ふ也. 4-5 是 如何にシヨンの娘 汝達の帝王は謙り給ひてアサナ親子に召て御幸(ゴコウ)ならせ給ふべし 古(イニシエ)ポロヘエタの申置れける事を遂させられん為也. 6-7 去ばヂンポロ ゼズス宣ひけるごとく アサナ⁽³⁾親子引きて参られ わが表著⁽⁴⁾を脱いで、上に掛け ゼズスを乗せ奉られければ 8 萬民 衣裳を脱ぎて道に敷き 或は木の枝を折敷き 9 前後左右に参り集りたる諸人 聲をあげ デウスの御名を以て来り給ふダビツの御子 天にをひて我等を扶け給へと申し奉る也.
(21v9-22r10)

- (1)底本に asana とあるが、ポルトガル語は asna なので、s と n の間に母音 a を挿入した本語の仮名表記（あるいは日本流の発音）に牽かれたローマ字表記ではないかと考えられる。(2)「尤 とがむ」(色葉字集21ウ) (3)底本に osana とあるが、asana (asna) の誤り。(4)「表著 ウハギ」(易林本節用集117-1)

【2 アサナ親子繋がれてあるを】VG: statim invenietis asinam alligatam et pullum cum ea (ロバが繋がれており、一緒に子どもがいるのをすぐに見つけるだろう). asina (牝驢馬)を本語「アサナ」で訳出。ヒイデスの導師は

asno を「驢馬」(121, Is.1:3) と訳す (jumento (ロバ, 役畜) も「驢馬」)。両訳の違いを説明するのは困難であるが、底本で本語が採用された理由については、次の二点が考えられる。(1)日本でロバという動物が一般的に認知されていなかったこと；日本に野生のロバは生息せず、早くから大陸より渡来してきたものの、家畜として定着することもなかったので、「驢馬」(または「うさぎ馬」) という名前や存在は知られていても、実際に見たことのある日本人はあまりいなかったと考えられる。イエズス会士たちも日本でロバを目にすることはなかったようで、ルイス・フロイスの「日欧文化比較」(1585) 第八章「馬に関すること」に「われわれの間には騾馬(ミユラ)、縞馬(ゼブラ)、驢馬(アスノ)、駄馬(アゼマラ)などがいる。日本にはこのようなものはいない」(岡田章雄訳・注、大航海時代叢書X, 岩波書店, p.583)とあり、ジョアン・ロドリゲスの「日本教会史」第七章第二節「日本にいろいろな種類の動物と鳥について」にも「シナやコーリア〔朝鮮〕にはきわめて沢山いる驢馬も日本にはいなくて、この前の戦争の時にコーリアからいくらか渡ってきた」(土井忠生・浜口乃二雄他訳・注、大航海時代叢書IX, p.276)と記されている。ただしこの理由からだけでは、「汝達の牛馬 池堤に落るにをひては」(39v, Lc.14:5)のように, asinus aut bos (ロバか牛) を「牛馬」という日本語の慣用表現によって訳出した (つまり、ロバを「馬」に置き換えた) 例を説明できない。(2)象徴としてのロバ；写本「ドミニカの抜書」はこの箇所を「アヅナ親子トハ需テ與(ジュデヨ)・前知與(ゼンチヨ)ノ事, ツナガレタルトハ, 諸悪ニツナガレタル事也」(『キリシタン研究』第二輯, 東京堂, p.4)と説明している。ロバはユダヤ人と異教徒、特に偶像崇拜の罪を背負わされている後者の象徴だったので、「馬」と訳してしまったのでは、この象徴を担うことはできない。以上の二点はどちらも補完的な関係にあり、いずれが欠けても、本語が採用された理由についての説明は成り立たない。

【5 如何にシヨンの娘 汝達の帝王は謙り給ひて アサナ親子に召て御幸ならせ給ふべし】VG: dicite filiae Sion ecce rex tuus venit tibi mansuetus et

sedens asinam et super pullum filium subiugalis (シオンの娘に告げよ。見よ、あなたの王は柔和で、そしてロバと荷を背負ったロバの子に乗って、あなたのところに来る)。本節は Za.9:9の *exulta satis filia Sion iubila filia Hierusalem ecce rex tuus venit tibi iustus et salvator ipse pauper et ascendens super asinam et super pullum filium asinae* (シオンの娘よ、大いに沸き上がれ、エルサレムの娘よ、歓呼せよ。見よ、あなたの王があなたのところへ来る、彼は義にして救世主、貧しくロバとロバの子に乗って) の省略引用である。dicite filiae Sion (シオンの娘に告げよ) が、底本では「如何にシヨンの娘」と直接語りかける表現で訳出されているが、これは Za. や並行する Io.12:15の呼格 *filia* に対応する。tuus (お前の) を「汝達の」と複数で訳しているのは誤訳ではなく、「シオンの娘」が神の民としてのイスラエルないしエルサレムの町を指すことを明示するためであろう。mansuetus (温良な) が底本で「謙り給ひて」と訳されたのも、イエスが王らしからぬ謙虚な姿で入城したことをさらに強調するために、Za.の *pauper* (貧しい) を踏まえて訳出した結果と考えられる。BlaiseのDLFによれば、この語は聖書中においては、ある社会的階級というよりもむしろ謙遜や解脱、試練におけるデウスへの恭順によって特徴付けられる宗教的な完成の一つの型を表わしているという。ちなみに *mansuetus* の原語 *πραῦς* は Mt.5:5, 11:29でも使用されているが、VG では *mitis* (柔和な) と訳されており、底本の日本語訳はいずれも「柔和(なる)」(94r, 86r)。LLI 「*Mansuetus, a, um. Lus. Cousa mansa, branda. Iap. Nhūuanaru mono, yauaracanaru mono* (柔和なるもの、柔らかなるもの).」, 聖經直解「慈善」。

【9 前後左右に参り集りたる諸人】VG: *Turbae autem quae praecedebant et quae sequebantur* (そして前に行き、後に従う群集は)。

【9 デウスの御名を以て来り給ふダビツの御子 天にをひて我等を扶け給へと申し奉る也】VG: *osanna Filio David benedictus qui venit in nomine Domini osanna in altissimis* (ダビデの子にオサナ、主の御名において来る

者は祝福されている、最も高い所でオサナ)。底本では *benedictus* (祝福されている) が訳されていない。*osanna* は〈どうかお救い下さい〉を意味するヘブライ語が転写されたギリシア語 *ὡσαννά* に由来する。この語はすべてイエスのエルサレム入城の場面に使用されており、そこでは Ps. 117:25-26 が取り入れられている。底本の「我等を扶け給へ」は、言葉の原意と Ps. 117:25 の *o Domine salvum fac* を踏まえて訳出されたものであろう。Mt. 21:9 の二つの *osanna* は、はじめにダビデの子としてのイエスに、次に神に対する祈願の呼び掛けとして用いられているが、底本の日本語訳では一つしか訳出されず、専らイエスに対する祈願という形になっている。聖經直解は「天主降榮。下福於達未之子。天主居極高自彼庇陰」のように第一と第二の *osanna* を訳し分ける。近代日本語訳はゴープル訳の「万(まん)歳なり」を除くと何れも「ホザ(サ)ナ」。

○御復活祭の主日 (Mc. 16: 1-7) 聖經直解 6-3ウ「耶穌復活本主日」

1 マリヤマグダネラ、マリヤジャカウベ、マリヤサロメ香ばしき薬を求めゼズスに塗り奉る為ニ 2 一番のサバドの未明に立出 御棺(ミカン)の下に近付申さるゝ折節 旭出ける也 3 石棺の蓋をば誰かあげ奉るべきやと互に語りひて見られければ 4 御棺の蓋開きてあるを見申さるゝ也 此蓋は大石(タイセキ)也 5 御棺の在所(アードコロ)に入れられければ 右の方に白衣の仁体⁽¹⁾あるを見て各驚かるゝに 6 アンジヨの云く 驚かるべからず クルスに掛り給ふナザレトのゼズスを尋ねらるゝ也 活(イキカエ)り給ひて爰に御座まさず 納め申所は是也 7 然ればヂシポロ ペイトロにもゼズス宣ひけるごとく ガリレアへ先に在ませば 行て見申さん事傳へ給へとありける也。(22r11-22v10)

(1)「仁体 じんたい」(落葉集51ウ)

【3 石棺の蓋をば誰かあげ奉るべきや】VG: *quis revolver nobis lapidem ab ostio monumenti* (誰が墓の入り口から石を転がしてくれるだろうか)。イエ

スが葬られたのは岩に造られた墓室で、入口は石によって閉められ人間が立ち入ることも可能な墓であった。底本で「石棺の蓋」と訳された背景には、西欧の「復活」図(石棺に天使が座り、空の石棺を三聖女に指し示す構図)の影響が想定される。聖經直解「墓前石」。

【4 御棺の蓋開きてあるを見申さるゝ也 此蓋は大石也】VG: viderunt revolutum lapidem erat quippe magnus valde(彼女達は転がしてある石を見た。確かに非常に大きいものであった)。「御棺の蓋開きてあるを」「此蓋は」と訳された理由については、3節註参照。

【5 御棺の在所に入れられければ 右の方に白衣の仁体あるを見て】VG: et introeuntes iu monumentum viderunt iuvenum sedentem in dextris coopertum stola candida(墓の中に入ると、白い衣をまとい座っている若者を見た)。iu monumentum(墓の中に)を「御棺の在所に」と訳したのは、日本の墓と埋葬の形式が異なるために「墓の中に」と訳すことが困難であったためか。底本では iuvenum(若い人を)が訳出されていない。

【6 アンジョの云く】VG: qui dicit illis(彼女たちに言うには)。「アンジョの云く」は、並行するMt. 28: 5を踏まえたため。聖經直解「神曰」。

○御復活後第一の主日 (Io. 20:19-31) 聖經直解6-24「耶穌復活後第一主日」

19 チシポロ ジュデウに恐れ一味してドミンゴの暮方に一家(イッケ)の門戸を閉ぢて居られける所に セズス来り給ひ チシポロの中に立せられ パクスラビスと宣ひ 20 御手(オンテ)の疵と右の脇の御疵を顕し給へば チシポロ見奉り悦び申されけるに 21 重ねてパクスラビスと宣ひ デウスバアデレ我を遣し給ふごとく 我 汝達を遣す也と宣ひて 22 チシポロに御息を吹かけ給ひ スピリトサントを受られ 23 汝達 赦すべき科は赦さるべし、赦さずば赦さるべからずと宣ふ也。 24 十一人の内一人トウマといふ疑人(ウタガイジン)ありセズス来り給ふ折節 漏れられけるに 25 残りのチシポロ 御主を見奉ると申されければ、トウマ御手の疵を見、釘の御跡に指をさし 御右の疵に手を入れ

ずばヒイデスに受くべからずと申されける也。 26 其日より八日目に當て チシポロ トウマ諸共に一家の門戸を閉ぢて居られけるに ゼズス来り給ひ其中に立せられ パクスヲビスと宣ひて 27 トウマに仰せけるは 御邊の指を爰にさして 手の疵を見 右の脇の疵に手を入れ 疑ひなくヒイデスに受られよと宣へば 28 其時トウマ ドミヌスメウス エト デウスメウスと申されければ 29 ゼズス 如何にトウマ 我を見らるゝに依てヒイデスに受られたり 見ずして受(ウケ)る者はベアトたるべしと宣ふ也。 30 去ばゼズス チシポロの前に數多の奇特を顯し給へ共 スキリツウラに記し申さず 31 只デウスヒイリヨにて在ます事 ヒイデスに受申べき為に此理りを記しければ ヒイデスに受るにをひては御名の功力を以てきせつの一命に極むるべし。(22v12-23v7)

【19 パクスヲビス】VG: *pax vobis* (あなたたちに平和). *pax vobis* の原語 *Εἰρήνη ὑμῖν* は ICC の Bernard によれば、東方では部屋に入る際の挨拶であるという(イエスが話したと推測されるアラム語の日常の挨拶「シャローム(平和があるように)」に由来するか)。ユダヤ人を恐れ、自身を見捨てた罪におののいていた弟子達に〈平和があるように〉と語るイエスの言葉なので、日本語に訳した方が理解しやすいと思われるが、定型表現であった(教会におけるキリシタンの日常的な挨拶だった可能性もある)ために敢えて日本語訳せず、ラテン語にとどめたものか。聖經直解「予平者。安居與偕」。参照:「御主ゼズキリント 其室内に入り給ひ、それらに無事を与へ給ふことを觀ずべし」(スピリツアル修行, 279v)

【20 御手の疵と右の脇の御疵を顯し給へば】VG: *ostendit eis manus et latus* (手と脇を彼らに見せた)。「疵」「右の」に対応する語はVGのラテン語文にはない。「疵」の方は Io.19:34に、イエスの死を確かめるために一兵士が槍でその脇を突く場面(Io.特有の記述)があるが、突かれた脇が右側であったという記述は聖書のどこにも見られない。ヒイデスの導師(1592)の扉には、トマスがひざまずいてキリストの右脇の傷に指を入れる図が見られるが、これ

はヨーロッパから齎された銅版画帖(1573, 旧水戸藩押収)中の「不信のトマス」図から模刻されたものと考えられている。底本の「右の脇の御疵」は、このような銅版画を念頭に訳された可能性がある。またこの訳出には、右側に槍持ち、左側手に海綿持ちを配したキリストの磔刑像も関係しているのではないかと考えられる。キリスト教では神の右手が絶対視されおり、キリストの場合も右手が左手よりも優位とされたので、磔刑像でも脇腹の聖痕は右側につけられた。槍持ちが右側に配されることになったのはこのためである。磔刑はキリストの生涯中最も劇的な場面であり、人類の罪を贖う救世主の象徴なので、この主題を扱った作品は、聖堂の内陣の中央など教会の重要なところに飾られる。したがって、この翻訳は教会の像を念頭に行なわれた可能性もある(仮にその磔刑像が別の構図・形態をとるものだったとしても、「右」が象徴する意味は、キリシタンにとって図像学的に常識に属することだったであろう)。ちなみに聖經直解に「右」の訳は見られないが、ヘロニモ・ナダルの『福音書画伝』(1593)の中国語訳『天主降生出像經解』(1637)の「耶穌被釘靈蹟疊現」(磔刑の場面)では、原書に〈右の〉にあたる語がないにも拘わらず、「右脇」と訳されている。

【22 スピリトサントを受られ】VG: accipite Spiritum Sanctum (聖霊を受けよ)。命令なので「受られよ」とありたいところ。23の remittuntur eis (それを赦す)が受動相現在にも拘わらず「赦さるべし」とあるので、命令の意味はここに込められていると見るべきか。

【24 十一人の内一人トウマといふ疑人あり】VG: Thomas autem unus ex duodecim qui dicitur Didymus (しかし12人の中の一人でディディムスと呼ばれるトマスは)。日本語訳の「十一人」は誤訳。Didymusは訳出されず「疑ひ人」が付加されている。トマスの〈イエスの復活に疑いを挟む者〉としての役割を強調するためか。参照:「十二人の内 ギヂムスといふトウマ」(使徒トマスの祝日, 84v)

【24 漏れられけるに】VG: non erat cum eis (彼らと一緒に居なかった)。参

照:「残りの御弟子と共に在り合はれざるに」(84v)

【31 ヒイデスに受るにをひては御名の功力を以てきせつの一命に極むるべし】

VG: *ut credentes vitam habeatis in nomine eius* (信じて、彼の名において命を持つように)。「きせつの」の意義不明。イエスの名により命を持つということは、彼による贖罪を受け入れて永遠の命を得ることを意味する。日本語訳「一命に極むる」にはその意味が反映している。聖經直解「必享常生也」。

○御復活後第二の主日 (Io. 10:11-16) 聖經直解 6-29 「耶穌復活後第二主日」

11 ゼズス ギシポロに宣く 我は良きパストル也。良きパストルといふはオリベヤの為に身命を惜まず 12 去ばわがオベリヤに非ず 又パストルに非ずして雇はれたる者は 狼(オンカメ) 来る時はオベリヤを捨てて 廃去⁽¹⁾するに依て 散り散りになりて 狼の為に食ひ殺さるゝ也 13 其故は雇はれたる者は オベリヤの主人に非ざるに依て廃去する也。14 我は良きパストルなるが故に 我オベリヤを見知り給ふごとく、15 我又デウスパアデレを見知り奉る也。我オベリヤの為に一命を渡す也 16 此立所(タチド)より外 餘のオベリヤを持ければ 内に引き入るべき事 わが為に専なるに依て わが辞を聞べければ 即一つのパストル 一つの立所たるべしと宣ふ也。(23v8-24r7)

(1)山田翻字は「敗去」とするが、VG: *dimittit oves et fugit* (羊を放棄して逃げ去る)より、「廃去 ハイキョ」(書言字考節用集八9ウ)とする。

【13 其故は雇はれたる者は オベリヤの主人に非ざるに依て廃去する也】 VG: *mercennarius autem fugit quia mercennarius est non pertinet ad eum de ovibus* (雇われ人が逃げるのは、雇われ人ゆえに羊を労らないからである)。

【14 我は良きパストルなるが故に 我オベリヤを見知り給ふごとく、15 我 又デウスパアデレを見知り奉る也】 VG: 14 *ego sum pastor bonus et cognosco meas et cognoscunt me meae* 15 *sicut novit me Pater et ego agnosco Patrem* (14 私は良い羊飼いで、自分の羊を知っており、羊も私を知っている。15 恰も父が私を知っておられ、私が父を知っているように)。VGの

14 cognoscunt me meae, 15 novit me Paterが訳出されていない(書写の際の誤脱か)。そのため、羊の羊飼に対する関係がイエスの神に対する関係に相当する14節と15節の並行関係が崩れている。

【16 此立所より外 餘のオベリヤを持ければ 内に引き入るべき事 わが為に專なるに依て わが辞を聞べければ 即一つのパストル 一つの立所たるべしと宣ふ也】VG: Et alias oves hebeo quae non sunt ex hoc ovili et illas oportet me adducere et vocem meam audient et fiet unum ovile unus pastor (またこの檻の中にいない他の羊をも持っており、彼らも導かねばならない。そして彼らは私の声を聞き、一つの檻、一人の羊飼いとなるだろう)。ギリシア語原典では、はじめの ovile (檻) が $\alpha\upsilon\lambda\eta$ (囲い)、二つめが $\ ποιμνῆ$ (群れ) と区別されており、前者はユダヤ民族の、後者はユダヤ人と異邦人からなる一つの共同体、教会(ヨハネ福音書には $\epsilon\kappa\kappa\lambda\eta\sigma\iota\alpha$ という語は現れない)を表している。ICCのBernardによれば、古ラテン語訳もこれに対応して ovile と grex としたのだが、ヒエロニムスのVGが同じ ovile で訳したため、何世紀もの間、二つのメタファー(特に後者)に対する誤解をまねいたという。ただしDLFによれば、ovile が〈教会〉のメタファーであることは理解されていたようである。底本の日本語訳で二つの ovile に対応するのは「立所(処)」。DLI「鹿や猪などの獣の巢窟 malhada. また、人の居所、すなわち、人の居る場所」、LLI「Ovile, is. Lus. Curral de ouelhas. Iap. Fitçujino voro (羊の檻, DLIの見出し語に voro はあるが vori はない「中に獣や牛などを入れて囲う囲い curral, または柵 cerca)。「おろ」には〈囲い, 柵〉の意味しかないが、「立所」は広く〈居場所, 住処〉を意味するので、共同体としての〈教会〉を表わす後者の ovile にも対応できるように、この訳語が採用されたのではないか。

○御復活後第三の主日 (Io. 16:16-22) 聖經直解 6-33「耶穌復活後第三主日」

16 ゼズス ギシポロに宣く 我 デウスパアレに到るべければ少し見らるべか

らず、又少し見らるべしと宣へば 17 チンポロ デウスパアデレに到るべければ少し見べからず 又少し見べしと宣ふ心は如何に！ 18 中にも我等に對し給ひ 少しと宣ふ心を得難きと申合せ尋申さんと致されけるを 19 セズス知召て 少し見べからず 少し見らるべしと言ひつる事を議せられ事や！ 20 真に汝達 涙を流して呼はるべけれ共 世界は悦ぶべし 然れども汝達の悲みは悦びなり替るべし。 21 喩へば女人 産に臨めば わが時来る故に⁽¹⁾悲むといへ共 産み終れば世界に人生ずる悦びに其辛勞を忘るべ也。 22 其ごとく今汝達一旦悲みを受らるべといへ共 重ねて我見べければ悦ばるべし、其悦びを奪ひ取る者有べからずと宣ふ也。(24r8-24v10)

(1)原文 *vagatoqui quitaru vyeni*とあり、山田翻字も「我が時来る上に」とするが、VG: *quia venit hora eius*より「故に」とする。

【16 少し見らるべからず、又少し見らるべし】VG: *modicum et iam non videbitis me et iterum modicum et videbitis me* (しばらくするとやがて、あなた方は私を見なくなるだろう。そして再びしばらくたつと、私を見るだろう)。 *modicum*は〈短い時間〉を表しているが、ここでは程度副詞「少し」で訳され、*iam* (やがて)が訳出されていないため、〈見ることができない時間や程度が少し〉と解され、後の文意が把握しにくくなっている。LLI「Lus. Cousa pouca. Iap. sucoxiqi coto (少しき事). Item, Adu. Pouco. Iap. Sucoxiq (少しく).」 参照:「少しの間 我を見べからず。やがて我を見べし」(スピリツアル修行, 282)

○復活後第四の主日 (Io. 16: 5-14) 聖經直解 6-36「耶穌復活後第三主日」

5 セズス チンポロに宣く 我を遣し給ふ所に帰るといへ共 汝達いつくに行くぞと問はれざるに 6 此理りを顕しければ心中に悲み満ちたり。 7 真に言ふ也。我 汝達の為に離るべ事専也。其故は我行かざれば悦びを与へらるべスピリトサント来り給ふべからず 我到るにをひては汝達にスピリトサントを与ゆべし。 8 去ばスピリトサント来り給ふ時は 科 ジユスチイサ ジユイゾに

付て此世界を嫌(モド)き給ふべし。 9 科とは我をヒイデスに受ざるに依て也。 10 ジュステイサとは御親に渡るべければ重ねて我を見らるべからず 11 ジュイゾとは此世界の司 早や糺し伏られけるに依て也。 12 汝達に知すべき事多しといへ共 今 受保ち難し。 13 真のスピリト来り給ふべき時 一切の真を汝達に教へ給ふべし。 去ば其身より宣ふべからず 只聞かるべき事を願し 以後あらん事を汝等告給ふべし 14 其故は言はるべき事は わが身より受らるべければ我を明かに知られ、又汝等に明かに告給ふべしと宣ふ也。(24v11-25r20)

【7 其故は我行かずんば悦びを与へらるゝスピリトサント来り給ふべからず】
 VG: si enim non abiero paracletus non veniet ad vos (私が去っていかなければ、擁護者はあなたたちのところに来ない)。paracletus (弁護士)が「スピリトサント」と訳出されたのは、新約でヨハネ文書にしか見られないこの語が、ここでは〈聖霊〉の称号として用いられていることによる。聖經直解も「聖神」。「悦びを与へらるる」と訳出されたのは、paracletusに〈慰め、喜ばせる人〉の意味があること、またイエスとの訣別に悲しむ弟子達に対して、聖霊が到来する意義を強調するためであろう。LLI「Lus. Defensor, ou auogado. Iap. Toriauxete, catōdo suru fito (取り合わせ手、方人する人)。Itē, Lus. Cosulador. Iap. Nadamete, yorocobaxete (宥め手、悦ばせ手)。」

【14 其故は言はるべき事は わが身より受らるべければ 我を明かに知られ、又汝等に明かに告給ふべしと宣ふ也】VG: ille me clarificabit quia de meo accipiet et annuntiabit vobis (彼が私を明らかにするだろう、それは私より受けて、あなたたちに知らせるからである)。「(其故は)言はるべき事は」にあたるラテン語文はないが quia を意識したものか。clarifico にあたる原語は $\delta\omicron\varsigma\acute{\alpha}\zeta\omega$ (栄光を与える)で、近代日本訳は全てこの意味で訳出している。

○復活後第五の主日 (Io. 16:23-30) 聖經直解 6-39 「耶穌復活後第五主日」

23 ゼズス チシポロに宣く 真に言ふ也 何事なりともわが名を以て御親に乞申

されば給はるべし。24 今までわが名を以て乞申さるゝ事なしといへ共 汝達の悦びを遂んが為に乞申さるゝにをひては受取らるべし。25 去ば譬(タトイ)を以て此儀を述るといへ共 譬を取らずして 御親の御内證を明かに顯すべき時節近付きければ 26 其日わが名を以て乞申さるべし。我 汝達の上を御親に申叶ゆべきといふには非ず 27 其故は汝達 我 デウスより出たる事をヒイデスに受け 我を大切に思はるゝに依て 御親 汝達を大切に思召す也。28 我 御親より此世界に來りぬれば 今此世界を聞いて⁽¹⁾御親に帰ると宣ひければ 29 チシポロ 今こそ譬なく明かに宣ふなれ、30 一切の事を知召すと只今弁へ申ければ 御身に尋奉るに及ばぬ也⁽²⁾。此儀を以て御身デウスより出給ふ事をヒイデスに受奉ると申されける也。(25v1-26r5)

(1)「聞 さしおく」(色葉字集17オ) (2)原文 *tazune tatemaccuru vojobanu nari*。

【25 御親の御内證を明かに顯すべき】VG: *palam de Patre adnuntiabo vobis* (父について明らかにあなた方に知らせる)。VGに日本語訳「御内證」に対応する語はない。イエスによって語られる父とは「神の意志」の啓示そのものであることから、この点を明示するために付加されたものであろう。聖經直解、バセ訳ともに「父之情」。

【29 今こそ譬なく明かに宣ふなれ】VG: *ecce nunc palam loqueris et proverbium nullum dicis* (見よ、あなたは今明らかに語る、そして少しも喩えを言わない)。ecceで始る強調のニュアンスを「こそ一已然形」の係結びで表現。待降節第二主日(Mt.11:8)の註解参照。

参考文献 (略号使用文献のみ—他の参考文献は註解終了時に一括して示す)

LLI: DICTIONARIVM LATINO LVSITANICVM AC IAPONICVM. Amacusa, 1595.

(福島邦道・三橋健解題, 1979, 勉誠社影印)

DLI: VOCABVLARIO DA LINGOA DE IAPAM. Nangasaqui, 1603. (亀井孝解題,

1973, 勉誠社影印), 「邦訳 日葡辞書」(土井忠生, 森田武, 長南実編訳, 1980, 岩波書店)

DLF: Blaise, A. *Dictionnaire latin-français des auteurs chrétiens*. Brepols, 1967.

ICC: The International Critical Commentary. Edinburgh, T&T CLARK. Bernard. J. H. *A Critical and Exegetical Commentary on the Gospel according to St. John*. Vol. 1 ('28, latest impression'93.), Vol. 2 (latest impression'85).